

光の子



No.93 2001. 5. 5.

- 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさいと、
主は言われる。(ルカによる福音書 6:31)



「利根川の土手で」

え・中島英子

愛の鐘

大利根の夕焼長し川長し

夕焼に立ちて夕焼疑はず

ここだけの夕焼にしておきにけり

つき貼りのハートは白し夕涼し

六月の海へ伸び出す鉄路かな

青岬乱打許さぬ愛の鐘

大利根の光の子らの日焼かな

落合 水尾 (『浮野』主宰)

「子どもの虐待」について - その2 -

理事長 飯田 進



平成十二年十二月十二日付けの「福島民友新聞紙上にシヨッキンク」な記事が日に飛び込んできました。県内のある町に居住している二十歳の実母が、九日の朝、自宅二階の寝室で、生後二ヶ月の次男が泣き止まなかったことに腹を立て、ポットに入っていた熱湯をかけ上半身にやけどを負わせ、数時間後に救急車を呼び、病院に運び、やけどが自然であったので医師が警察に通告し事実が判明したそうです。

赤ちゃんは意識不明の重体であると報じられていました。たしかに虐待の対象は子どもだけではありませんが、何故・子どもの虐待が問題視されるのかというと、子どもは最も力の弱い存在であり、自分で自分の生命を守ることが出来ないのです。

あえて強調しておきたいことは親や大人による無条件の愛護がなければ、子どもは生存することが出来ないのです。さらに、子どもは自分で親を選ぶことも出来ないのです。子どもは、人間としての様々な権利をもっていますが、それらの中で主体的な権利は「生命の権利」です。しかし、子どもはその権利を自分で行使することができないのが特徴です。

親、大人、社会での権利を優先すれば子どもの権利は侵害されやすいのです。すべての子どもの生命の安全や健全な発達が保障される社会の構築が強く望まれるのです。

全国の児童相談所長会が、相談ケースの中から虐待ケースを調査したところ、平成二年度では一、一〇一件が発見され、予想外の数字がみられたため毎年実施することになりました。残念ながち件数は年々上昇し、平成十一年度においては一、六三一件の相談件数があり、調査を開始した平成二年度の一〇倍以上も上昇していることが報告されています。その要因は、核家族化であるとか、少子化、地域社会の脆弱化等々であると言われており、その通りであろうと思います。

その中でも特に家庭の崩壊、家庭内の孤立化が心配されます。家族員個々の要求を充足させようとすればするほど、期待に反して家庭内の絆は均衡を失い、孤立化が進み、やがて崩壊が懸念されます。

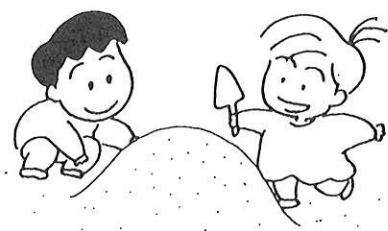
こうした現象の一因について、マザー・テレサは次のように言っています。

「・・・今の世の中に不幸と苦しみが多い理由は、家庭に愛が欠如しているからです。今日は誰もが皆非

常に忙しく、豊かさ(物的に)を求めて子どもたちは両親と過ごす時間がなく、両親同士はお互いのためにさく時間を失ってきています。世の中の平和の崩壊は家庭の中から、すでに始まっているのです・・・。」

子どもは神さまからの授かりものであり、親はその子を生み育てるという、この世の中で一番尊く美しいことをしているのです。

その子どもがどうして変わっていくのか。子どもの人格形成にとって家庭環境は最も重要であるのに、物に支配され過ぎ大切な心理的環境を失ってきているからだと言っています。



■ エッセイ ■ 親の背中

一ヶ月ほど前から取りかかった彫刻の作品の前で、粘土を付けたら削ったり、時には表面の切りっぱなしの細い枝でたいたたり、悪戦苦闘を続けていた。

そこへ、光子さんが現れた。ひと休みしようと思っていたところだし「コーヒーを入れますからどうぞ。」ということになり、私は粘土の付いた手を洗った。手に付いた粘土は簡単に落ちるが、爪のあたりに付いた粘土は、タワシで落とすことになる。家内がお菓子を持って来る。そこで、三人雑談をしながらのコーヒーブレイクである。

「この間ね。」と光子さんが言った。「この間、東京にいる孫が来ていたんですよ。この孫は、私にべたべたくっついて、掃除するにも洗濯をするにも、いつもそばにいたんですよ。」と言う。

孫が田舎のおばあちゃんの所へ来て、そばに付きつきり、そんな事はいくらかもある話である。決して珍しい事ではない。

しかし、その後がおかしかった。

彫刻家 中島 陸雄

「掃除する時にね、私が、つい掃除機に足をかけてコードを引っぱり出しちゃったんですよ。しかもこの時たまたまそうしただけで、決して私が習慣にしている訳じゃあないんですが。」

おばあちゃんと言っても、若いおばあちゃんだし、元気はつらつらの光子さんだから、つい、ちよつと、と足をかけたただけなのだろう。

「孫が東京へ帰った後、娘から叱られちゃったんですよ。お母さんが悪い事を教えたでしょう。こどもが掃除機に足をかけて、コードを引っぱり出すのを、おもしろがってやっているのよって。」

私たち三人は大笑いをしてしまった。特に家内は、笑いが止まらなかった。

実は、私の家でもすっかり同じような、小さな事件があったばかりなのである。

やはり主役は孫である。一歳何ヶ月かの孫が、時折私の家に預けられる。小さいアパートの三階に住んでいる孫は、私の家の草ぼうぼうの庭が好きである。私は、屋敷の内には

除草剤は撒かないし、落ち葉は掃かないで置いている。特に晩秋にいちよの落ち葉が大量に落ちて、庭中を黄色で被いつくす様子は、私も好きだし、ぜひ、この上で孫を遊ばせたいと思っていた。この美しい黄色の落ち葉を踏んで歩く、遊ぶという体験は、本人が意識しなくても、何か潜在的に良い蓄積になるのではないかなという希望も持っている。

孫は、身の丈の半分ほどにもなる雑草の中をまるで大冒険でもするよううに歩くのである。そのことが大変嬉しい事なのであるが、いくらかの小さな危険も潜んでいるので、家内が前になり後ろになりして付き添うのを常とした。

ところが、或る日、例によって家に預けられた孫が、家の庭のあたりを散歩している時、小さいこどものくせに、両うでを後ろに回し、半分腰を曲げて歩いているのである。初めのうちは別に気にも止めなかったのだが、ずっとその格好をして右に行き左に歩くのに気づいた時、思わず吹き出してしまった。つまり、それは、孫の付き添いをする時、いつも決まって家内が示す姿なのである。

おかしくもあり恐ろしくもあるこの光景は、私には思いもかけない出来事であった。

子どもは無意識である。庭を散歩する時にはいつもおばあちゃんがそのような格好をするから、自然にそのまねをただけである。良いも悪いもない、ましておばあちゃんがなぜそのような格好をして歩くのか、その意味など考える筈もない。

「親の背中を見て子どもは育つ、と言われるけど、文字通り大人の背中を見て孫が真似したんだね。」と私と光子さんと家内は笑ってしまったわけである。

私はこのことを、或る会合の席でしゃべった。

親の背中を見て・・・と、落ちを付けたつもりだった。そして、よせばよいのに説教じみた言葉も付け加えてしまったのである。

「この二つの事柄は、具体的に大人の行動を形として真似した子どもの話ですが、大人の行動だけでなく、物事に対する考え方や感じ方など、精神的なものについても、これと全く同じ事が言えるとなると、大人の責任というものは、大きくて恐ろしいものですね。」と結んだのであった。



私の大学での一日は、部屋のパソコンを立ち上げることから始まる。まず到着しているメールをチェックする。ウィークデイだと五、六通、週明けだと十通以上のメールが到着している。自分宛にきたものには、ほとんどの場合返事を出す。秘書にも知らせておいたほうが良い

もの、彼女に「転送」する。自分からもかなり「新規」のメールを発信する。

山形大学医学部 仙道 富士郎
部学長 仙道 富士郎
計算したことはないが平均して一日一時間ぐらいいはEメールを使っているのではないだろうか。何しろ便利なのである。

IT、この危うきもの

学者もどきのつぶやき ④8
よく「ドタキャン」をする。いったん引き受けたのに、より大事だと彼が判断する集まりから招待されると、平気でそれらに乗りかえる。そしてその度に、彼らは両親や妻を危篤に陥れる。「親が危篤になって行けない」。もつともこれは、当方の力がないことを証明していること

にもなるのだが。彼らだって、そんな見え見えの嘘をついてあとで自分が返しをされるような相手に対しては、そんなことをしないからである。そんな事態になると、最も速い発信手段を使って何とか事態を好転させようとするのだが、その待つている間の長いこと長いこと。最後は、へたくそな英語で電話をかけることになってしまい、まさに冷や汗ものである。

我々の研究にとっても、今やコンピュータは無くてはならないものである。まずパソコンの情報収集力はすごい。数年前までは、自分たちの研究分野の関連情報をいかに効果的に集めるかは、大仕事であった。我が国の指導的立場にいると言われてきた研究者の一部の人たちは、外国からの研究情報収集力が優れていたためにそうなった人も少なくない。しかし、今や事態はすっかり変わってしまった。大学院の学生がパソコンの前に座ってインターネットにアクセスして関連のサイトを開けば、最新の研究情報を世界中どこでも手に入れることが出来る時代になってしまった。まさに情報のグローバル化である。そのような状況下で、自分は何を研究するのか、これからの研究者は何とも大変で、気の毒なほどである。しかし、こんなに便利なパソコンにも大変困ったことがある。それは「エラー」である。パソコンをお使いになったこと

のない方は「そんな最先端の技術にエラーが起こるのか」といぶかるかも知れないが、事実なのである。パソコンをお使いになっている方は「フムフム」と頷かれるであろう。それが、何の予告も無しに突如として起こるから質が悪い。文章を打ち込んでいる最中に「フリーズ（凍るの意）」してしまうと、もうどうにもならない。いつもはそんなことに備えて文章を「保存」しておくのだが、時には夢中になつて「保存」することも忘れて、長い文章をパソコンに書き続けていることもある。そんな時に限って「フリーズ」事件は起こるのである。万休事休とは、このことを言うのであろうか。「フリーズ」の他に困ったエラーとしては、「文字化け」がある。到着したメールが英語と数字、時には漢字混じりの勿論判読不可能な不気味な文字群と化している時がある。こんな時、私はまず秘書のところへ飛び込む。彼女は理系の学部を卒業しているせいか、なかなかパソコンが強い。彼女は色々試みながら面白いことを言う。「先生のように」パソコンに八つ当たりしたら、だめなですよ。「よしよし」と可愛がってやれば、言うことを聞きますよ。そんなものかも知れない。でも私は、腹が立つのである。コンピュータの最大手は、御存じのようにビルゲイツ率いるマイクロソフト社である。その機種はWINDOWSである。

ところが、医学部の人たちは、今やマイクロソフト社に吸収されそうなアップルコンピュータ社の「MACINTOSH（通称マック）」を使っている人が多い。小生もご多分に漏れず「マック」である。「文字化け」は、決まらずにWINDOWSからメールが来た時に起こるのである。お互いのシステムを譲ろうとしない、まさに資本主義の犠牲にされている我々は、たまつたものではない。どうして共用システムを作れないのか。秘書に何と言われても、このことには私は怒るのである。もの凄く便利さと仕方がないエラー発生と、何ともアンビバレンツな感じを与えてくれるパソコンではあるが、このITの危うい感じを強く印象付けされたのは、スペースシャトルから送られてくる映像が、機械の故障で動画から静止画像に変わってしまったときである。スペースシャトルと言えば、コンピュータ技術の粋を集めたものである筈である。「フリーズ」しないように万全のバックアップシステムで守られている筈なのにこんなことが起こってしまうとは、私は何か危ういという感じを通り越して、恐ろしいという感じに陥った。

2つの文化に生きる

27

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

もう降らないだろうと思い、庭に草花を植えたりすると決まって翌日白いものが地面を覆っている。この冬は本当によく雪が散らつた。これだけ雪が多い冬は十七年ぶりだということだが、十七年前といえちように息子が生まれた年だったなと先日、当時の頃を懐かしく思い出した。あの冬も本当によく雪が降つた。そして、外に出ればいろいろな所が凍り付いていた。日陰はもちろん、ちよつとした坂道も凍ってテカテカに光っていた。そんな中、妊娠後期には夫と二人で英語のラマーズ法出産教室に通った。ラマーズ法呼吸出産のレッスンは都内の広尾の小さい丘の上のマンションの一室で行われた。毎週、大きなお腹で、その

ガチガチに凍った坂道を昇り降りするのは至難の業だった。今、転んで早産につながると思ひ、夫婦で命がけで通つたのを覚えている。出産する病院もあちこち探した。夫も分娩室に入れること。そして出産直後から母子（夫も）同室に寝泊まりできること。これは完全母乳で子どもを育てるのに不可欠な条件だった。母乳育児に関しては世界中にネットワークを持っているラ・レチエ・リーグというボランティア団体に夫が連絡を取り、出産直前から電話連絡やその後の月例会等に出席することで精神的にもたくさんサポートをしていただいた。夫はとにかく出産に関して医学書を始めさまざま本を読んだり情報を得たりして「出産は病気ではない。新しく生まれて来る命を自然な形で迎えられる場所を。」とあちこち病院を捜しまわった。結局そんな理想に合った病院は近くにはなく、途方に暮れていた時、ラマーズ法の先生から助産婦会の電話番号をいただき、近くにとても良い助産院が見つかった。もしも何か異常があった場合にその助産院から車で一分のところの産婦人科のお医者様もバックアップしてくださることになった。結局私は三人のベテラン助産婦さんに囲まれて分娩室に入るぎりぎり

りまでお茶など飲んでアットホームな雰囲気の中、暖かい春の三月二十九日の夕方、予定日より二三日早く無事に息子を産んだ。なんと四〇〇グラム程度の元気な赤ちゃんだった。初乳も与えて身も心も身軽になり、やつと春がきたと思つて、眠りにつき、翌朝、窓の外を見たら、あたり一面が銀世界だった。何と十七年前は三月三十日に雪が降っていた。ほんとうに雪の多い冬だった。

冬が寒ければ寒いほど、春のおとずれがほんとうに待ち遠しく、そしてその春が来た時の感激はひとしおである。そしてその感激は花のつぼみがほころびる度にますます深みを増していく。私の大好きな花、梅の花から始まって桃の花、モクレン、桜と次から次と見事に咲いては散りながら春をかたちづくっていく。なかでもクライマックスを飾るのはちょうどイースターの頃に咲く「はなみづき」の花である。キリストの十字架と復活の頃に咲くこの花はよく見ると花びらが十字架の形をしていて中央がいばらの冠のような形をしている。アメリカではイースターの花としてとても親しまれている花である。



プリズム

子どもたちの季節

仙道家

春は出発の季節です。子どもたちも、進級したり進学したり、社会に出たり、一人一人新しいスタートをきりました。

その中で皆、様々な表情を見せま
す。高校生の悠子ちゃんは、新学期
が始まってから、それに慣れるまで
の教週間、疲れのせい、口数が少
なくボーッとしている日々が続きま
した。小学生の佳美ちゃんは、始業
式前後から、不安のためでしょうか、
荒々しい言動がみられました。新し
い人間関係への適応が苦手な幼稚園
の裕くんは、緊張しきった表情で進
級式のぞんでいました。多くのス
トレスのあった冬をのりこえた中学
生の詩美ちゃんは、少しずつ意欲的
になりつつあります。

これら一つ一つの表現、特に不安
の表現は、新学期になる前から充分
に予想できたはずだったのですが、
春になると私自身も、光の子ども
の家での生活の児童養護という仕事

のスタートを必ず思いおこします。

この仕事に携わること、子どもたち
と生活を共にすることから心が離れ
ず、その思いだけで、就職を望んだ
学生時代との大きなギャップを埋め
るのに長い時間がかかりました。こ
の時期、子どもたちの家での生活と
学校という社会の隔たりの中で奮戦
している姿を見、初心を思わされま
す。

そして、そんな中で日々たくまし
く成長していく彼らに勇気を与えら
れ、優しさに励まされ、私自身やっ
てくることができ、今日一日を終え
ることができ、心から嬉し
く感じています。 藤本 曜子



光の中で

佐藤家

四月も半ばを過ぎ、暖かくなって
参りましたが、皆様はいかがお過ご
してでしょうか。

私は、光の子どもの家に来て一年
が経ちました。この一年色々な事が
ありましたが、子どもたち、そして
職員たちのおかげで、新しい年度を
スタートする事ができました。

この四月、私の担当している十五
歳の福子が、希望していた高校に入
学する事ができました。新しい制服、
靴、鞆、そして初めての電車通学、
何もかもが新しい事ばかりです。期
待も多い反面、不安いっぱいスター
トを切った事と思います。高校から
帰ってくると、疲れた表情の時間が多
く、笑顔の出ない時があり、心配に
なってしまう。しかし、「友だ
ちができたよ」「コンピュータやっ
たよ」と嬉しそうに話します。心配
だった気持ちも薄れ、安心と同時に
嬉しくなっています。これから
の高校生活の中には、きつと楽しい
ことだけでなく辛い時もあるでしょ
う。色々なことを経験して、一喜一
憂する。そんな福子に常に寄り添っ
ていく担当者、ひとりの人でありた
いと、今強く思っています。

もう一人、四歳の静一が、何とか
幼稚園に入園しました。「あと何回
寝たら幼稚園？」と聞かれ、「あと
百十日」と答えていた頃が懐かし
く思えます。

幼稚園の予備保育の二日前の夜、
「今日寝て、あと一回寝たら幼稚園？」
と聞かれたので、「そうだよ」と言
うと「そっか」と何だか真剣に答
えていました。いつもパワフルな静一
も幼稚園という新しい世界に対する
不安を期待よりも大きく感じていた
のでしよう。

予備保育、入園式と静一の大好き
なお母さんと一緒に出席する事がで
き、幼稚園で良いスタートが切れま
した。今、元気に幼稚園に通って
いますが、幼稚園でおりこうさんに頑
張っている分、家ではちよっとわが
ままになっています。あまりのわが
ままに、参りそうになってしまっ
てしまいましたが、新しい環境で頑張ろ
うとしているのですから、家では元氣
パワーを充電できるように、十分に静
一の思いを受け容れようと、他職員
の協力を得て、日々悪戦苦闘中です。
どんなにわがままを言っても、いた
ずらをして、幼稚園に送っていつ
て、「市川さん、迎えに来てね」と
笑顔で言われると、かわいくて、か
わいくて仕方ない静一。静一、こ

原田家日記

桜の花が澄み切った青空に気持ち
良く咲き誇っていたその日、幼稚園
の入園式がありました。原田家では
とつてもかわいい女の子、藤耶と悠
花が入園しました。

藤耶は直前まで幼稚園に行かせる
べきかどうか悩み続けました。情緒
の発達や人間関係の形成にちよつび
り遅れがあったこと、そして何より
も担当者が担当者になりきれいな
い状況があったからです。心配は尽
きなかつたのですが、本人の「幼
園に行きたい」という強い想いを汲
み取りました。

これから、幼稚園の先生にたくさ
んお世話になりながら、新しい担当
者に替わった藤耶そして私のグルー
プに加わった悠花を見守り続けてい
きたいです。

将司は十六年間生活した光の子ど
もの家をこの三月に巣立ち、社会人
になりました。この一年間で伝えな
ければならないことは山程あつたけ

れど、実際に伝えられたことはほと
んど無いまま社会に送り出すことを
誰よりも将司に申し訳ない思いで一
杯でした。

「何かがあつても何もなくても、
いつでも帰ってきて」という言葉を
最後に贈りました。その言葉に込め
てくれているのか、毎週帰ってきて
くれます。弱冠十八歳にしての仕事、
一人暮らしに「疲れ」を感じるこ
とが多いようですが、ここに帰ってき
て少しでもその疲れが癒やされれば、
と思っています。

新しい生活が始まった藤耶、悠花、
将司、そしてひとつ学年が上がった
子どもたちひとりひとりとつてこ
の1年が、あの日の桜の花のように
満開に咲き誇ってほしいと心より願っ
ています。今年度もどうぞよろしく
お願いいたします。 服部沙絵子



れからも一緒に頑張ろうね。

市川 美穂



河のほとりで

倉澤家

この数年、たかさんのボランティア
アの方たちにお世話になっていま
す。倉沢家では高三の亜希が三人の専属
ボランティアに学習指導をしてくら
てきました。学習指導はもちろん、
担当者にも言いにくい悩み事の相談
にのつて下さったり、一緒に外出し
て下さったり、学習ボランティア以
上のかかわりをして下さいました。
そして更にうれしいことは三人とも
卒業しボランティアを辞めてからも
個人的な亜希とのつき合いを続けて
下さっているということです。

そんな様子を見てか、中三の有希
と中二の美恵からもぜひ専属のボラ
ンティアを・・という強い要望があ
り、中三の由紀子には四月から専属
の方にお願ひしています。中二の美
恵にも様子を見ながら・・と考えて

います。

夕食を提供するだけで他には何の
お礼もできない私たちですが、たか
さんの学生さんたちが自分の大切な
時間を子どもたちの為に費やして下
さっています。

こうしてたくさんの方々にお助けら
れ、支えられていることを実感して
います。今はまだ助けられ、支えら
れる側の子どもたちですが、自分た
ちの経験を生かし、いつの日か他人
の役に立てる人間に成長してほしく
と願っています。

倉沢 智子



現場から

続・光の子らししく

②

岩崎 まり子

佐藤家のダイニングから、管理棟は真つ正面です。その管理棟の外壁には葛がからまつているのですが、つい先日ですっかり葉が落ち、何か壁に這っているようにしか見えなかつたのです。それが、いつの頃からか瑞々しい若い葉がいくつもいくつも出てきていて、その若葉が壁を覆っているのです。いつの間になんか？私は少なからずショックでした。人は、自分がその経過を知ることなく、いきなり結果がぱつと目の前に提示されたとき、良くも悪くもショックを受けるでしょう。私

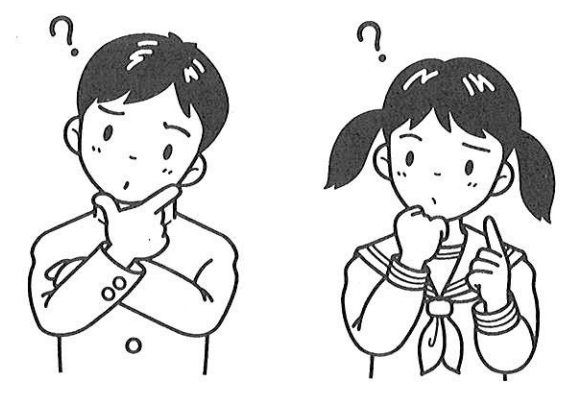
の小さな変化や何か大切なことを見落とさないでいられたらどうか、という大きな衝撃でした。どうでもいようなことに心奪われ、思い悩み、一番弱い、自身では一つの権利も行使できない子どもたちの心に心を配れなかつたことを省みずにはいらぬにここに居ようとしているのか、それをいつでも思い返し、一番大切なことに何度でも立ち返りながら、この新しい年度を乗り越えていきたいと思います。どうぞ、ご指導をよろしくお願いします。

に疲れている様子です。やたらハイになってしまったり、やたら動いてみたり、やたら苛立ってみたり、やたら弱気になってみたり・・・そんなある夜、中高生たちとお茶をしているときに多音音が言いました。「やりたいことってわかんないんだよね。」彼女は、普通科に通う就職希望の高校三年生です。「やりたいことがわからない」これは、実によく聞く言葉です。私がここで関わった子どもたちで、年長の子どもはみんな言いました。一番新しいところでは、萌季が志望する大学に落ちたときに言っているのを聞きました。その時は私に言いました。「みんなそうなんだよ」と。みんな、悩みなから選択し、その後でまた悩み、また選択し、その繰り返しなのだろうと思います。「やり直して出来るの?」

の尽きない進路のことなのに、自己肯定感の少ない子どもたちには尚更です。本当は、こういうときに自信を持って選択できるくらい「力」を持つて選べるよう関わらなければならなかつたのですが、働きが及ばず、そこまで至っていないことをどう反省したらいいかわからないくらい反省しています。せめて、大事な進路選択では共に悩みたいと思っています。そして、子どもたち一人ひとりが「いざとなつたら、あそこがある」と思ってくれたらいいと思います。最後に頼ってこられたときに、逃げない自分でありたいと願っています。皆さん、どんな年度にしたいですか。どうぞ、お体を大切に。



「尋ねる萌季に「勿論」と答え、極端に前置きした上で転職を繰り返している卒業生の名前を出しました。そこで初めて彼女は笑いました。ただでさえ悩み



養護メモ 87

弱い者たちには

菅原 哲男

このところ、児童養護施設は不適切な関わりを受けた子どもたちの入所がほとんどである。五年ほど前には考えることもできない状況が児童養護施設の日常になっている。

うに言いながら子どもたちへ対応してきている。それでも、子どもたちの要求は底なしなのである。とうとうこの三月末、経験七年の保育士の神田幸枝がドクターストップで長い休みに入った。高校時代は陸上の選手で、体力的には申し分のない能力で、さっぱりとした性格の彼女が、子どもに添い寝をしていると、胸が苦しくなり呼吸が激しくて眠れぬ夜が続いたのである。

児童虐待防止法の施行により、やが上にも虐待という言葉が喧しい。虐待という日本語よりは不適切な扱いとか関わりという方が適当だと言われている。

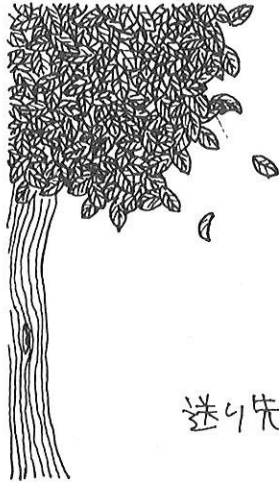
『仕事』で子どもを『愛』せるか、という光の子どもの家が始まってから続いている問いが、もう一つ深みを加えて関わる職員たちに日常的に突きつけられている。

この不適切な関わりを受けてきた子どもたちは、当然受けるべき関わりを受けられず、あつて欲しくない扱いを受けてきているので、その心理的精神的なねじれの程度は計り知れないほど複雑なのである。だから、つい先ほどまでの、可哀想な子どもたちを引き受けて温めてやれば、熱い関係が醸し出されるだろう、というような牧歌的な思いでこの仕事へは関われない。関わる者を壊してしまふほど強烈なエネルギーの消費が要求されるのである。

このような状況の到来を、どこかの大学の研究者や学者が予想していただろうか。そしてこのような現実を知る研究者が見あたらない。まさに、研究室と現場との乖離であり、問題を同時に共有できない不幸である。それはひとり研究者たちだけの問題ではなく、行政を司る者や政治に関わる者たちにも同様である。

光の子どもの家では、抱っこして！と言われる前に、抱っこさせて！かわい！と、先手受容を心がけるよ

このような現場の状況を黙視できず、埼玉県児童養護施設協議会は、



今年度も6月9日に
基準外職員確保のための
バザーを行います。
バザー用品のご寄付力を
よろしくお願ひします。
送り先:光の子どもの家バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

12月1日 ▶ 2001年1月末日

- 12月
 幼児9名 小学生8名 中学生7名 高校生8名
 5日 冬休み個別計画協議
 東松山市社会福祉協議会来訪
 6日 TV朝日より取材の申し入れ
 9日 永野三恵氏よりご招待の人形劇に大勢が
 10日 第3アドヴェント 礼拝と夕食会の満ち足りた一時
 ○ 福島勲前理事長の新刊「鎖国とキリスト教」出版祝
 い会奥様ご長男おいでになって楽しく
 11日 原道小学校教師との懇談会実施 予期しない収穫も
 12日 浦和児童相談所担当福祉士2名が来訪して情報交換
 と今後の対応など協議
 17日 第4アドヴェントいよいよ降誕祭に向けて準備OK
 24日 クリスマスイヴキャンドルサーヴィスと夕食会
 大人と子ども相互のメッセージと讃美聖書朗読 フ
 ァンタスティックに 夜サンタが枕元にプレゼント
 25日 クリスマスページェントとお祝いの会教会、学校、
 家族、友だち、後援会ボランティアなど130名余
 の参集で厳肅にそして楽しく
 30日 年末帰省開始
 今月の物品ご寄贈者 横浜フェリス女学院、毎日新聞東京社
 会部、大利根町東婦人会、堀沢まり子、仙道喜美子、はむこ
 会、落合洋平の各位など88団体個人から、感謝

- 2001年1月
 1日 全職員と年越しの家族、子どもたちとで元旦礼拝と
 新世紀の第1食を おせちとお年玉も
 2日 地域のお年始回り30余軒
 5日 お正月気分をぶっ飛ばし3学期を迎え撃つ会
 ○ 東京電力よりパソコン指導に大橋さん齊藤さんが
 ○ 子ども家庭支援センター仕事始め 早くも相談2件
 15日 越谷児童相談所より一時保護依頼 センターで
 20日 東京家政大学より四名来訪して懇談
 ○ 大学入試センター試験萌季受験
 24日 アドバンメカッティック労働組合より4名来訪し、
 懇談とお励ましを 感謝
 28日 中学1年の詩美絵画展に入選川里町展示場に展示
 ○ ご支援のミツミエ工業顧問井上高明氏のご厚意で六
 年前に高校卒業して定職を持たない山形睦夫が就職
 29日 この日から来年度事業計画の作業始まる
 今月の物品ご寄贈者 吉松みどり 永野三恵 鈴木重義 タカラ
 ブネ栗橋店 堀切京子 小柳千晶 若柳慶賀 暁星小学校シャミ
 ナード会 小川まさこ 松本明子 こども未来財団 小川久子
 江森百合子 大東流通サービス 東洋英和女学院小学部 桑野
 食品工業 井村文伯 大塚東一 生田光子 松本明子 白石澄雄
 アイエヌジー生命保険 仙道清太郎 永福千穂 女子学院中学・
 高校 須藤喜代 つくし幼稚園の各位様 感謝 (くら)

反 射 光

☆光の子どもの家の周りに美しい水田が広がります☆虐待という言葉が独り歩きしそうなこの国の状況は、それら恐ろしく思えます☆虐待という現象を高額紙幣で括るようにはなく最小貨幣で数えるような注意深さで(フッサー)見ていかなければならないと思ひます☆ここに暮らすと時間の単位は年であることを感じます☆樹木や田園の表情が四季折々に変化を見せてくれるのです☆春を待たなければ花は咲かず、秋にならないと実がなりません☆そんな時間を科学技術が変化させ、自分の必要な時に花を咲かせ、実をならせたりするようになりました☆その時まで待たないので☆待てない人が増え「ムカッキ」「キレル」子どもたちが大人になったことも虐待を増やしている因の一つかとも思えます☆それでも、子どもたちは植物が空を目指して伸びるように真っ直ぐに生きたい成長したいと願っているのです☆その手伝いにほんの少しでも！と願って励みます☆乞う、更なるご支援を！ (哲)